

水を差す

下川おかし

登場人物

男1 岡村啓一(四二)

女1 小林幸代(四九)

女2 ウエイトレス

## 喫茶店。

男がいる。テーブルには水、コーヒー、目印のバラ一輪。約束の時間より大分前に到着してしまったが、長い時間待っていたことを相手に悟られたくないので、コーヒーにはほとんど手をつけていない。ために、そのことが誰の目にも明らかなくらい冷めてしまっている。

ウエイトレスがグラスに水を足していく。

男1「(時計をみて、立ちあがり、帰ろうとテーブルのバラを手に取る)」

女が、「みつけた〜!」という様子で男の前に立つ。

女1「よかった、まにあった」

男1「…」

女1「それ(と男のバラを指さす。彼女は大きな赤いバラの描かれたネッカチーフをしている)」

男1「(それに気づき) え?」

女1「遅くなって。ごめんなさい、てまどっちゃって、バラのネッカチーフあったはずなのに、いざ探すとなかなかみつからなくて、そんなに衣裳持ちってわけでもないのに。あ、でもね、断然コレにしたかったの、昔からお気に入り的一张羅。あら、一张羅って最近あんまり耳にしなくない?...座りましよ(と座る)」

男1「あ、はい(座る)」

女1「(ウエイトレスに)あの、ここにメニューお願いします。(男に)はじめまして」

男1「は、はじめまして」

女1「ん、ふしぎ！ こっちがはじめましてだと、そちらも初めましてなんですわね。へえ〜」

男1「いや。ほとんどの場合、そう、だと思えます」

女1「そう。ほとんどそうなの。すごい。そうなんだ。へえ〜」

男1「だって、そうですよ…」

女1「そうなんですわね…」

男1「…」

女1「不思議ねえ〜(メニューを見てウエイトレスに)すいませ〜ん。  
この昔ながらのウインナコーヒーください」

男1「ウインナコーヒー」

女1「懐かしいわねえ…ウインナコーヒー。」

男1「そ、そうかな」

女1「あ！ うそうそ、もちろん、そういう、何？自分の？体験？そういうんじゃないくて、懐かしい、つまりなんだろう、ほら、夕日を眺めているとふっとそんな気になるっていうか、うん、そうそう」

男1「三丁目の夕日、ですか」

女1「三丁目でも一丁目でも、」

男1「映画、ですよ。原作は漫画だけど」

女1「映画。三丁目の、夕日…(スマホですばやく検索) ああああ」

男1「みましたか？」

女1 「うくん、みた、かな：ほら、テレビでやってるのを家事しながら、みたかなあつて。わたしね、小雪に似てるっていわれたことあるんだ、すっぴんの。」

男1 「：はい」